

2016年度長野原学研究会活動報告

靄 理恵子

Report on Activities by the Study Group of Naganohara in Fiscal Year 2016

Rieko TSURU

研究会設立の経緯と目的

本研究会は、観光コミュニティ学部教員の老川慶喜の発案で、老川と同学部教員の靄理恵子が呼びかけ人となり、本学部教員を中心に2016年度設立された。群馬県長野原町において各自の専門性を生かした研究を行うことを通して、地域貢献につなげたいとの思いがある。跡見学園の研修所があることでもともと縁のある自治体であったが、本研究会設立の動きと連動して長野原町と大学が地域連携協定を締結し、協力関係を充実させていく体制が作られた。設立呼びかけ文は以下の通りである。

「長野原町の総合的研究」（長野原学）研究会の立ち上げについて（提案）

老川慶喜（観光デザイン学科）

靄 理恵子（コミュニティデザイン学科）

昨年度、訪日外国人客数は1900万人を突破し、大阪で万国博覧会が開催された1970年以来45年ぶりに日本人海外渡航者の数を上まわりました。中国人観光客による「爆買い」が流行語大賞に選ばれたのは、そうした事態を反映したものでしょう。

また、昨年3月には北陸新幹線が金沢まで延伸し、富山・石川・福井の北陸3県に空前的観光ブームを引き起こしています。この3月には北海道新幹線新青森～新函館北斗間が開通しますので、日本の観光ブームは当分続くものと思われる。

しかし、年明けとともに株価は続落し、この数年来政府や財界が声高に叫んでいる「地方創生」もそれほどうまくは行ってないと思われる。バブル経済崩壊後、日本は「失われた10年」を経験しましたが、それが20年、30年と引き伸ばされているかのようです。

その要因はさまざま、とても一言では表現できませんが、もっとも重要なのは高度成長期以来の半世紀以上にわたる国づくり、地域づくりへの真摯な反省がなされていないという点にあるように思います。過疎も東京への一極集中も、「無縁社会」（共同体の破壊）も、いまいまはじまったことではなく、ひたすら「大規模・集中化」による「成長」を求めてきた、高度成長期以来の国づくり、地域づくりがもたらしたものとイえます。

このように考えてきますと、私たちの学部（観光コミュニティ学部）の取り組むべき課題もおぼろげながら見えてくるのではないのでしょうか。「観光」と「コミュニティ」（地域）を別々のものとせず、両者を重ねたり、ズラしたりしながら考えることによって、日本の社会が直面している大きな問題を明らかにすることができるように思います。

そこで、私をご提案したいのは、本学部の教員による群馬県吾妻郡長野原町に関する総合的研究です。長野原町は群馬県北西部に位置し、地域のほとんどが標高500m以上の高地で、北部は吾妻川流域、南部は浅間高原地帯に属しています。面積は133.85km²、人口は5523人（1970年の人口は7342人）です。主要産業は高原野菜の栽培や酪農などの農業で、とくにトウモロコシ、トマト、レタス、白菜、ブルーベリー、花豆などが特産として知られています。

民主党政権のときに建設工事を止められた八ツ場（やんば）ダムは、自民政権のもとで復活し、周辺工事はほぼ終了しまでもなく本体工事に取り掛かろうとしています。ダムが完成すると、湯かけ祭りで有名な川原湯温泉も、ダム湖の湖底に沈むこととなりますので、すでに高台に移転し新たな温泉街をつくりつつあります。

また、南部の北軽井沢地区には、戦前期から大学村、一匡邑という特色ある別荘地があり、戦後には草軽電鉄が敷設されたこともあって、音楽村、領主の館など、さまざまな別荘地がつくられていきます。群馬県は群馬交響楽団で有名ですが、北軽井沢にも「ミュージックホール」という野外音楽堂があり、若き日の小澤征爾など、著名な音楽家が修業を積んだといわれています。また、高峰秀子主演の本邦初の絵天然色映画「カルメン故郷に帰る」の舞台となったところでもあります。

このように、北軽井沢には興味深い歴史が多々あり、かつての繁栄がしのばれますが、現在は草津と軽井沢という日本でも有数の観光地に挟まれ、やや精彩を欠いているというのが偽らざるところです。また、北軽井沢には跡見学園の研修所や自然観察園があり、私たちにとっては文京を第1キャンパス、新座を第2キャンパスとすれば、第3のキャンパスともいえます。

それでは、具体的にどのように研究に取り組みばよいのでしょうか。残念ながら私たちにもこれはといったアイデアはありません。ただ、本学部の教員が、それぞれの専門分野を生かして、長野原町を対象にした研究をして論文を書き、それを総合すれば長野原町のかかえている課題や再生の道筋がみえてくるのではないかと考えています。

たとえば、湯かけ祭りは「奇祭」として知られていますが、それを徹底して調査をして実態を明らかにしていけば、その祭りをどのように生かして現在の地域づくりに生かしていくかということもみえてくるのではないのでしょうか。また、草軽電鉄と長野原町のかかわりを明らかにすれば、その遺構をどのように保存していくべきかということもみえてくるように思います。海外の村との比較なども重要と思っています。とくに長野原町には「日本ロマンチック街道」とよばれる道路が通っていますので、ドイツとの比較は重要と思われる。

長野原町までは、高速道路を走れば2時間30分程度で行くことができますし、軽井沢（北陸新幹線）、長野原草津口（JR 吾妻線）の駅からバスも出ています。宿舎には、跡見の研修所を利用できます。したがって、研究のフィールドとしては適当なのではないかと思われます。さいわい、長野原町の協力も得られることになっています。長野原町は、地域の活性化を望んでいます。それに協力しつつ、私たちの学部としても研究実績を積んでいくことを考えていると思っています。

以上、長々と述べましたが、詳細はこの研究会が発足しましたら、ゆっくりと相談したいと思っています。繰り返しになりますが、要は長野原町を対象に、それぞれの先生が自らの専門を生かした研究をしていくというラフな研究会を立ち上げたいということであり、多くの方のご参加を期待しています。

なお、当面はこのプロジェクトのためのファンドはありませんので、個人研究費や授業運営費の個人割当分などを利用していかざるをえませんが、研究の方向性がみえたところで科研費などの外部資金、学内の特別研究費などを獲得していきたいと思っています。

今年度の活動概要

今年度は11月末までで4回の研究会を行った。12月に5回目を予定している。

それぞれの開催日時や報告者名・タイトルは以下の通りである。

第1回 2016年5月11日（水）17：30～20：00 跡見学園女子大学新座キャンパス

報告：鶴理恵子「群馬県吾妻郡長野原町における研究の可能性 ―生活環境主義とジェンダー論の統合をめざして―」

出席者は約20名で、全員がそれぞれ自分の専門分野についての自己紹介や取り組んでみたいテーマ等を話し、研究会の今後の進め方や方向性、可能性等活発な意見交換を行った。

第2回 2016年7月9日（土）14：00～7月10日（日）16：00 群馬県長野原町

7月9日 14：30～18：00 跡見学園の北軽井沢研修所にて研究会（報告：土居洋平「農村回帰現象とUIターンの新展開 ―長野原町で農村移住を研究する意義―」、小川功「吾妻牧場収束と地域社会 ―北軽井沢別荘開発前史」）

出席者は長野原高校の先生方、町役場の方、上毛新聞社の方等含め、10数人で、質疑応答が活発になされ、予定の終了時間を大きくこえた。

18：30～21：00 研修所内にて懇親会。長野原町の町長もご参加いただき、町長になるまでの放浪や仕事のこと、町行政にかける思い等を間近にうかがうことができた。

7月10日 9：00～16：00 長野原町近辺の巡検。町役場企画政策課 中村剛課長の運転・ご案内により、ハッ場ダム工事現場、（新）川原湯温泉、道の駅（ハッ場ふるさと館）、鎌原観音堂、大学村、浅間火山博物館等、長野原町内および隣接地域を回った。

第3回 2016年10月18日（火）

17：30～20：00 跡見学園女子大学文京キャンパス、報告：藤田実（桜美林大学）「ハッ場ダムと地域社会」、懇親会。

桜美林大学経済研究所の共同研究（『ハッ場ダムと地域社会』）の代表者であった藤田先生に共同研究立ち上げの経緯、本研究におけるメンバー内での共通認識等、研究成果である著書の内容を補足するご報告をいただいた。調査は2009年頃で終了しているため、その後の変化、特に生活再建の状況や地域社会の現状について調査研究することの意義も述べられた。

第4回 2016年11月20日（日）

13：30～17：30 群馬県長野原町 跡見学園北軽井沢研修所にて研究会、報告者：萩原睦男（長野原町長）、隈上雅志（観光施設勤務 プレジデントリゾート）、山崎聡（大規模野菜農家+シンガーソングライター）、星野美紀（酪農家）、中村剛（役場企画政策課長）、藤野麻子（ライター、編集者）。中村課長以外の5名の方は、8月27日に行われた「きたかる移住計画」フォーラムのパネリストである。フォーラムの内容をふまえた上で、なお語りきれなかった点について、事前におうかがいしたいことの諸項目をメモ書きにしてお渡ししていた。当日は、ほぼそれに沿ってお話しいただき、質疑応答も数多くなされた。懇親会は隈上さんが勤務されているホテルで、和やかな雰囲気の中で話が弾んだ。

予定 第5回 2016年12月21日（水）

報告：篠原靖「長野原町が抱えるダム事業と総合的な観光戦略について」
鶴理恵子「暮らしの維持・再建と地域社会の再構築」